



無責任
第一集

無責任 第一集

詩人とは何か書かずにはいられない人種である。

などといきつてみても、実は締切がないと案外のものびりしてしまうものである。そんなわけで、書くためには自ら締め切りを作り出すが良い。「無責任」とはそうして生まれた雑誌である。

締め切りを守るならば一人より二人がいい。締め切りを守れなかった時に格好悪いからである。お互い励まし合うこともあるが、お互いを監視していると言った方が正しいだろう。

清水らくは・浮島の二人は一年間締め切りを守り通した。よくやった。感動した。

「無責任」はいわば締切という概念を追求したものであり、ついでに詩歌誌である。詩と短歌、それらが入り乱れる様は無責任というより無計画だが、思いの外作者の二人はこだわっている。無頓着ではない。

毎月テーマを決めて創ってきたが、読者には伝わらないテーマも多かった。それでもいい。いやちよつときびしい。「よし、テーマは送り狼だ」「それでいこう」それがおかしい。とはいえ私たちは走り続けた。一年間で十二号を作ることができた。今回それらをまとめ、さらに書き下ろし作品を加え、素敵な表紙まで描いていただいたのである。もはや無責任とは呼ばせない「無責任」である。

見てもらえればわかるように、詩と呼んでいいかわからないものも載っている。そこが無責任である。難しい漢字の読み方がわからない。そこが無責任である。でも、何となく気になっちゃう。そういう人には責任をとりましょう。「無責任」は、まだまだ続いていくのです。

それでは、「無責任」の世界をお楽しみください。

責任者 清水らくは

ああ驟雨音をかきとるすべなくば
逃げ出す俺を誰も止めるな

浮島

露と落ち

絶叫が込められているひようたんを
あつさり燃やす大河の反射
この星は僕らを乗せてどこへ行く
ひよっこり見えた銀河の出口
その穴は夢への扉絶望を
さつぱり流す七時間半

落波

あれからまだ俺は
浅瀬にいる
水の表面に見とれながら
まだ
まるくなつたガラス片を
あきんどよろしく転がしている
瞼の上で、へその上で、肩の上で
言ってしまう俺は
怖いのだ不可能を可能にするのが
左腕をいからせて冷たい水をこじあけるのが
やつは魚を手紙だと言ったが
俺が握りつぶせば肉にもどる
ぐずぐずになつた断片から
にがい胆汁が落日のようににじみだす
夢のまた夢俺は
銀色の二次方程式を持っていた
あざみいろの磁石も持っていた
だが水は肉は俺たちを忘れてくれない
エタノールを駒に変え、チエスを打て
お前らのクイーンは
いきを吹きかければ
たちまち青く燃え上がる算段さ
そいつを俺は
俺は
俺は持っていた持っていたのだ

浮島

残り四線が逃げ出した

上真ん中下

三つしか表せない

音符たちは戸惑っている

ト音記号は笑っている

「串刺しも一本なら我慢できるわい」

そうですか

仕方ないのでできることをする

はいはい「こちこち

まずは様々な長さの音符

シャープにフラット

クレッシェンドデクレッシェンド

時折アフタヌーンティー

出来上がったものはそれなりだ

がんばったけれど

所詮それなりではない

音楽は安定に安住して安易にアンドウ

やはり世界には五線が必要だった

ぐっと力を入れて線を伸ばした

地球を一周してずれたのが二本目

銀河を一周してずれたのが三本目

宇宙を一周してずれたのが四本目

存在論を何周もして

ようやく隙間を見つけて忍び込んで

綻びから新しく顔を出したのが五本目

楽譜は元通りになった

音楽も輝きを取り戻した

「また串刺しになってしもた」

ト音記号だけは不満そうだが

音符たちは満足そうだ

整頓された音楽は

世界を安定させている

そしたら急に虚しくなって

こっそりと逃げ出してしまった

シャープにフラット

クレッシェンドデクレッシェンド

記号たちがついてきた

また何かおもしろいことをしようか

毎日煉瓦を運ぶんですね
きつと何かが出来上がるでしょう
けれども山道は危ないですよ
それに僕の縄張りの中です
送つて差し上げましょうこつそりとですが
尻尾がくるんとしてるんですね
見たことのない形です
興味が湧いてきました
あなたは何を目指しているんだろう
煉瓦が積み上がるように
何かが造られていくことは
私の人生には何一つないんです
だからぜひあなたには
無事でいてほしい
影で笑うのは誰ですか
あなたたちもくるんとした尻尾
下品なものは嫌いです
いいことを教えてあげましょう
私が怒った時は
この牙が光るんですよ
遠吠えしてみましようか
肺活量には自信があります
ただ虚しくなるのだけにと
決して口にはしません
私は一つ誓いました
あなたの敵になるものは
全て私の敵でもある
ずっと見守っていますから
安心して煉瓦を運ぶんですよ

送り狼をさせてよきみだけの
ぼくだけの赤ずきんになってよ

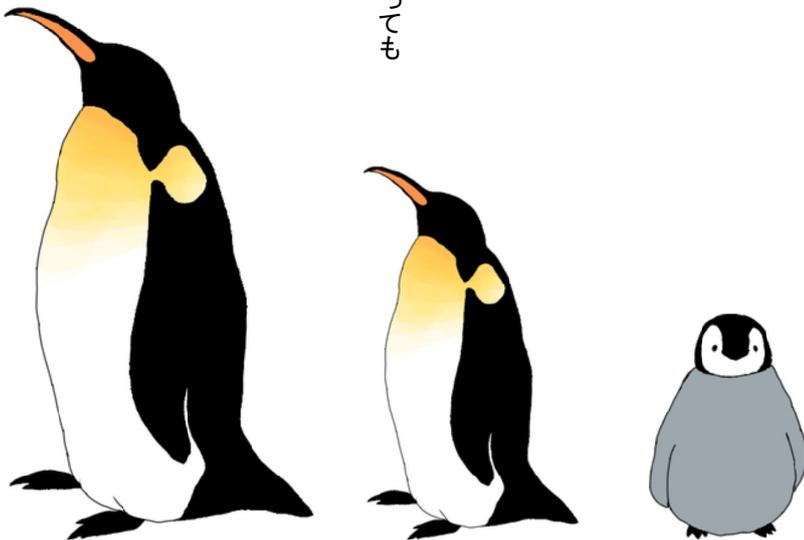
浮島

「こんにちはいらっしやいませ
《見るな、俺を》
こちら三点あたためますか？」

浮島

毎日食べるコンビニ弁当のケースを
綺麗に洗って積み上げていく
いつか空を突き抜けて
人工衛星に届くかもしれない
本当はただ
君に見つけてほしいだけ
旅立った頃の志は
資源ごみの日に出してしまった
青いコンビニのまん前の家
最上階のバルコニー付きの部屋で
ただひたすら生き続けている
眺めると遠くには山々
語りかけて答えない塊
ある日全てのケースが消えていた
そして置き手紙が
残念ながら弁当のケース語はわからない
手も足もない姿で
とても苦労することだろう
そして君の目に
届くことはないだろう
再び弁当のケースを積み上げはじめた
鎖で縛っている
僕の日から
逃れることはないように
いつか銀河も突き破って
過去まで届くように

ぼくはきつと
夜というものだ
どんなに明るい街にあっても
射殺されたアパッチの夢を見る
ぼくはきつと
ペンギンだ
あまりに遠いものだから
どこにいるかもわからないし、
どこにいないのかもわからない
でもたぶん
チューインガムのデザインにはいる
ぼくはきつと
アンドロイドだ
通信がとれた月にあっても
ヒトへの憧れは、飢えつつける
ぼくは
ぼくは
きつと夏だ
きつと、きつと
かんかん暑い夏だ
たとえ
耳が凍るような谷川の中にあっても
太陽へ手を伸ばす



三色ボールペン

ほくら仲良し三色ボールペンです
いつも一緒にいるけれど

たまにひとり顔が見えなくなり
働いているってことだけれど
ちよつとさびしくもなるのです

私たち三色ボールペンです

いつも楽しくしているけれど

どんどんインクが減っていきます

充実感はあるけれど

いつか来る死が怖いです

ねえどうしてそんな顔をするんだい

いっだってとても悲しいのに

二人はずっと笑っている

ねえ気付いていないかい

俺はずっと殻の中にいるのに

でもちよつと

だけど少し

しかし本当は

つらいこともあれば

やるせない瞬間や

楽しいこともあって

やっぱりや

べつだろ

きこい

書類をいっぱい書いたから

お別れのときが近いよつです

感謝の言葉とかは

考える余裕がなかつ

清水らくは

採点をいっぱいしたから
終わりが迫ってきました
二人に会えて
私は幸せだつ

孤独が幅を利かせている
たった一人残されて

筆箱の一番下で

誰からも忘れ去られている

だけど本当はとか

でも本心ではとか

そんなことは絶対に言わない

さびしい

切ない

俺は今永遠に続く海である

しかし少しずつ固くなつていく

何も表現できなくなる前に

せめて考えておこう

何を書くべきなのか

ああでも思いつかない

時間よもう少しゆっくりと

でもしかしたけどもうだめだ



ぐうちよきはあ

浮島

夕暮れは水面と石とぼくたちへ朽ちろとしきりにささやく
聖歌

前髪をはさみで切る日お前らは誰もわたしを知らないく
せに

青空はかぎりなくある爆弾をギフト包装する教師にも

君となら危うい綾取り終わらない夢を操りそして殺めて

落波

鳥籠くらく錆びれば飼育された微熱、
男よ夜はせぐりくる

浮島

「エンドレスリーグ」 清水らくは	私	君	あいつ	勝敗	順位
私	★	どこまでも空ならいいけど、限界があると言っていた。どこまでも空だと証明して、どこまでも行けると言っていたよ。	飾らないことを飾りにしているから嫌いだ。同じ人を見つめているから嫌いだ。でもどうしても友情は花を咲かせてしまうんだ。	誰にも勝てなかったけれど、誰にも傷つけられなかった。そういう人生が続いている。	多分、どうしようもない位置で、それでもまだ届きそうな位置。信じるにも信じないにも残酷な位置。
君	★	★	すぐく惹かれるときに、すぐくわかってしまった。そつと手を触れた後に、ずつと距離を置きたくなります。	ぎつとすべてが中途半端に、なんとか均等を保っています。だからいつまでも、メビウスがぐるぐると続いていきます。	私の横にはいつも誰かひよつとしたら世界をいてくれます。だけど一周する直前かとも思いつつかはちよつと前に出てみたいのです。
あいつ	★	★	★	いつも負けているつもりだったけれど、まだ決着はついていなかった。夢は常に努力を強制してくる。	めいていないこともある。

瓢箪山人

瓢箪山に墜落した宇宙船から発見された宇宙人は瓢箪山人と呼ばれることになった
辞書に新しい項目が追加されたが漢字が難しいのでひょうたん人と呼ばれることも多くWeb辞書にはそちらも追加された
また見た目がマルクスに似ていることからスペースマルクシアンとかスペマルなども呼ばれたがこちらははややこしいので採用されなかった
瓢箪山人は踊りがうまかった
瓢箪山ダンスが流行した
辞書に登録された
瓢箪山人はほとんど食事をせず
酸素も吸わずゴミも出さず
エロジーの代わりにヒョウタンロジーと言われ始めた
まずはウィキペディアに載った
次々と辞書は更新されていった
千年が経過した
地球から地球人が消えて
瓢箪山人しかいなくなった
彼らは辞書に意味を見出さなかった
亡霊たちが恨めしそうに辞書を見ていた
そして緑にあふれた世界
平和な世界の中で
一切の辞書は不要だった

ガリラヤの荒野、
己を掻き抱き唾液と灼けた舌を糾う

浮島

「大地はお前によつてのろわれ、お前は一生、土
から食べ物をとる。大地はお前のためにいばらと
あざみを生やし、お前は野の草を食べるだろう。

お前は額に汗を流しながら、パンをえてついに土へ
帰る、お前は土からとられたのだから。

お前はちりなのだから、ちりへと還る」

〔創世記〕

サンタクラスおちさまへ

あなたは今年のクリスマスにも

あたしに何か贈物を下さいますか？

去年はヴァオリンを下さいましたね

一昨年はお人形を下さいました

その先の年にはリボンでしたわね

今年は何を下さいます

あたしは十六になりました

あたしはもう玩具も人形も

ヴァオリンもほしくはありませんの

ほうなぜねつてお聞きなされるの

その訳は聖マリア様が御存じです

それは手で遊んだり眼で見たり

耳で聞くものではありません

何か下さるのだつたらどうぞ

聖マリア様にお尋ね下さいな

さやうなら

十二月五日

しづ

『青い小径』より

星屑を集めた中にふたしづくマリアの告げし虚空と鼓動

落波

—俺の歌をすべてお前にやる。だからお前のその歌をくれ。

水の流れ

浮島

わたしの夜はいつもやわらかさに満ちていた
つめたかったけれど

あいらしい香りがひたいにふりかかった
木々のくらがり、橋の裏、水の奥、

幾重もくらすさを重ねるように
あたりには

くさぐさの死とくさぐさの悲しみが沁み込んでいた

わたしたちはみんな帰路につく
イマージユの水は飲み込むものからやってくる

わたしはその事を知っていたし

夜のほうもわたしのことを了解していた
のぞみはるか遠くへといってしまうが、

とおく橋をわたる電車のあかりはとも近いのだった

変電所のそばをすぎ

たんぼのあぜ道を赤いイヤホンの男が歩いた

せかいは丸みを帯びていたが、女友だちの悲しみも丸かった

わたしはどこへもいけないし、とおくには何もなかった

送電線のむこうから風がふいた

くらきよりくらき道にぞ入りぬべき遙かにてらせ山の端の月
和泉式部

最終スイッチ

清水らくは

祈ったら届く答えならいらぬ
スイッチを押したら止まらない
三人の教団はこんなにもろくて
偽りも装う隙がないほどだった
割り切れない問題を嫌っている
君達はとても美しい醜態晒して
辿り着ける僕だけが苦しんでる
理不尽が溢れても朝日が眩しい

二人の事情で分かる僕の立場

の

答

え

は

出

よ

う

が

な

こ

よ

しばらくは隠されている関係が
全てを拘束するときがくるから
決して恨まない感情を出さない
それが僕の唯一のイレギュラー
誰よりも正しさに純情であって
二人を祝福すらして見せるから
立ち上がる力を僅かばかりでも
明日も垂直に太陽を見上げたい

答えてよガリレオ・フィガロ。ピタゴラス
息のできない明日の長さは？

こたえ 永遠といちにち

浮島

聖体拝領

「なあんにも、できなかつたよ」
絶望は息のできない朝焼けの色

カーテンは飛べないさかな
すぎるようにオキシドールとつぶやいた朝

《お前たちせいっぱいに声をあげるのよ
死にたくなる冬空でも》

まっしろで恐ろしい朝、
祈りますただとおい地下世界のマリア

浮島

腰から上は人

腰から下が馬になった日から
いろんな場所に行くのが億劫だ
バスにも乗れないトイレに入れない
社会は四本足に優しくない

飲み会をいくつも断った
就職の面接もあきらめた
人生の色が減っていく
気付いたら走り出していた
速かった

夢は番組制作
いろんな人に届けたかった
今はただ走ってる
誰もが振り返るけれど
誰もが目をそらす
山を越えてたどりついた
湖のほとりで
感情に名前を付けて
一休みした

自分以外誰もいないところでは
特に何も困らなくて
それこそが絶望だった
何年か暮らしてみると
そこそこに幸せで
何を望んでいたのか
忘れてしまった
ある日目覚めると
二本足に戻っていた
それもまた絶望だった

清水らくは

炭酸水のアリス

あるとき歌がとだえた
それは休符にしては長すぎたが
はたして死ではなかった

おじいさんは
レコードから音が流れなくなったのをいぶかしんだが
その夜はねむることにした
いくつもの季節がながれ
水辺では憧ればかりが焚かれていた

そしてふと彼は理解した
せいかいは炭酸のしゅわしゅわした泡のようなもの
浅黒く肌の焼けた女の子の出ていった

夏への扉

浮島

あまりにも鮮明な映像になって
世間ではゲームと現実の区別がつかなくなって
彼は世界へと飛び出した
憧れのアイスクリームを食べたくて
家中を探したのだけれど
どうしても見つけれなかった
冷蔵庫のことを知らなかったのだ
扉を開けることができなかったのだ
玄関の大きな段差を乗り越えて
靴の中を探索している時
辺りに光が充滿した
画面の向こう側にいつもいる
少年が帰ってきたのだ
彼は入れ替わりに光の元へと飛び出した
世界は容赦なく彼を傷つけた
太陽の光も
吹きすさぶ風も
猫の鳴き声さえ
現実では過剰だった
それでも彼は外側へと向かい続けた
無謀な若者特有の根拠のない勇ましさは
彼を真理の傍らまで案内した
そこにはたった一つ
大きな乾電池が鎮座していた
気が付くと彼は画面の中に戻っていた
そこはそこで温かい場所なのだ
それでも彼の想いは現実へと向かう
現代の若者はゲームに満足しないのだ



無責任 第一集

責任者 清水らくは

副責任者 浮島

イラスト 鈴山岬

発行 無責任zone

発行日 2013年7月15日